

仏教における生命観

－仏教の現代的課題－

学位論文内容の要旨

本論文は全体を第一部と第二部に分けた二部構成になっている。第一部では自己犠牲というテーマの下に原始仏教・大乘仏教における事例を取り上げ比較検討する。

第二部では現代世界における生命観の問題として、脳死・臓器移植、安楽死・尊厳死、自殺等の事例を取り上げる。また人間の生命観と大きく関わる環境問題を取り上げ、またその環境問題と密接に関係する戦争の事例を通し、平和と仏教について考察を重ねた。以下、その概要を記せば次の通りである。

第一部第一章では、原始仏教における生命観を取り上げた。原始経典は人間が本来孤独な存在であるとする。死の問題を契機に根本命題を立て、苦悩からの解脱を説いている。苦の究極である死を如何に克服するかということは、如何に生きるのかという問題を提示したと考えられる。

仏は過去世において衆生救済の菩薩行を行じ、善行功徳を積み現世において悟りを得ることができたと説く。ジャータカ中、捨身行という自己犠牲をテーマとするものにあつては、身施という究極の修行が、成仏という結果となって顕れることが示されているといえよう。

第一部第二章では、大乘仏教における生命観を取り上げた。大乘経典に説かれたジャータカの中には、捨身命の結末が報われず、救われない物語がある。ここに大乘仏教が目指した空の思想が反映されていると考えられる。行動の結果を期待する心は執著心として退けられる。したがって大乘経典に説く捨身命は、その決定心が天から試されるという次元を脱し、身命をかけることの意義は、ひとえに衆生救済のためであるとするのである。

特異な大乘菩薩行として殺生肯定の物語がある。日蓮は『涅槃経』に説く殺人許容の教説を取り上げ、その真の意味は謗法者の断命ではなく、その謗法心を断つということであると解釈した。この日蓮の解釈により、殺生を否定しながら肯定もする大乘『涅槃経』の教説は整合性を保ち、謗法者・殉教者どちらも成仏の因を得ることができたのである。

第一部第三章では、古代インドにおける自殺を取り上げた。自殺についてバラモン教・ヒンドゥー教では、自殺が贖罪行として行われた時には認め、それ以外は禁じた。その他、苦行者が解脱を目指す最終段階の修行ともみなされた。このような状況下にヒンドゥー聖典には寡婦殉死物語が説かれ、それらの影響を受けてインド古来の風習であるサティーが生まれたと考えられている。

仏教では自殺について律文献は軽罪とし、經典は比丘が自殺直前に解脱していたので、戒律には抵触しないとした。また論書は自殺が殺生戒には相当しないと説いた。これらを通して見えてくるのは、仏教は人がたとい人生に躓こうとも、生きる事の意義を説き、解脱を求めることを諦めないように慇懃したものであると考える。

第一部第四章では、仏教信仰の実践と生命を取り上げた。仏教信仰の迫害例として、中国仏教者の南岳慧思、我が国の日蓮、日親、日奥を取り上げて検証した。また現代の事例として、日本山妙法寺僧侶の横塚信行師を取り上げた。キリスト教の迫害事例としては、「二十六聖人」を取り上げた。迫害に耐える信仰の力は、仏教・キリスト教共に殉教者に通底する。そればかりでなく、仏教では日蓮が迫害を加えた謗法者の悪業を成仏の因へと導き、キリスト教ではサビエルが迫害を耐えることは功德を積むと説いた。つまり両者共に迫害者の救済を祈るという、究極的に同じ点に到達していたのである。

第二部第一章では、脳死・臓器移植を取り上げた。脳死は臓器移植を目的とした医学的見地からの死の定義である。臓器移植が行われるのに伴い、臓器売買が闇市場で行われるようになった。臓器移植は人間臓器のパーツ化という思考を強めた。移植医療は様々な分野に問題を投げかけると共に、死の概念の多様化をもたらしている。

仏教者の中には、臓器提供が「三輪清浄の布施」として行われるならば、認められるとする主張がある。しかし仏典では人間の生命を、寿命・体温・意識の無くなった時が死であると規定している。したがって、脳死を前提とする移植医療は不可能ということになる。以上のようなことを鑑みると、人間が脳死を判定し、臓器提供することは、仏教的見地との齟齬をきたすと考える。

第二部第二章では、安楽死・尊厳死、現代の自殺問題を取り上げた。仏典では安楽死・尊厳死に相当する事例は、律蔵に多く見られる。それらによれば、仏は苦しみから解放させようと死に至らしめた事例は、波羅夷罪に相当するとして慈悲殺を戒めた。また慈悲殺幫助ともいえる行為をした比丘・比丘尼を波羅夷罪とされている。

あるいは看病に疲れた比丘が看病放棄し、病僧を死に至らしめたことについて、仏は軽罪の偷蘭遮罪に相当するとした。また、持戒具足しながら病苦に苦しむ長老に、比丘たちは尊厳を維持するためとして死を勧め、長老は断食死した。仏は長老に死を勧めた比丘たちは波羅夷罪に相当すると説き、尊厳死に通じる考えを否定された。

第二部第三章では、仏教と環境を取り上げた。環境問題も突き詰めるならば、人間中心の思考が自然破壊をもたらし、地球的問題として浮上したと見ることができる。環境問題に対する様々な立場があるが、仏教学者の共通の意見では、環境問題は人間の欲望が肥大化したことにより引き起こされたということである。

環境問題に関連する東アジアの仏教思想に草木成仏説がある。この草木成仏説は自然界を単なる資源として見る近代科学の姿勢を改め、現代世界が必要とする根本的な環境観を提示することになると考える。とくに日蓮の草木成仏説は、法華経修行者の実践が「生身の仏」を顕現させ、それによって草木の成仏が完成するものであると解釈される。すなわち、修行者と草木とは依正不二で一体であり、修行者の成仏が同時に草木の成仏であるとして解される。この点は従来の解釈には示されない新知見である。

第二部第四章では、環境問題と戦争を取り上げた。軍事に起因する環境汚染は、人体に深刻な影響を与えているにも拘らず、軍事は環境問題から切り離されている。しかし、核兵器の放射能汚染による人体への影響、環境汚染は計り知れないことが明らかになりつつ

ある。今日劣化ウラン弾も緊急的な課題となっているが、そのような問題も結局はその根本的原因は人間の心の奥に潜む無明に帰着すると解される。

第二部第五章では、平和と仏教を取り上げた。戦後、仏教者が関わった平和運動に砂川闘争がある。この時参加していた僧侶の姿が後年、アメリカ・インディアン運動方針に、大きな影響を与えた。仏舎利塔は平和塔という意味が付与された事で、仏教の枠を超え平和の象徴として多くの賛同を得た。

仏舎利塔建立も平和行進も一人の僧侶の誓願から開始され、時には政府を動かし世界をも動かす原動力の一つになった。これらの事例が提示するのは、精神的仕事に対しては、精神的支援をする人々が世界にいるということである。仏教者として平和への誓願を立て、行動に移した事が広く受け入れられたのは、平和の心は宗教、民族、国家を超越し、誰しもが共有できることを証明したものであると考える。

以上の検討の結果に基づき、結論として仏教が生命とその生命を育む地球の存続について重要で意義ある提言を行うことができると述べ、その具体例として平和行進と仏舎利塔建立を挙げている。

学位論文審査の要旨

主 査 教 授 藤 井 教 公
副 査 教 授 細 田 典 明
副 査 教 授 櫻 井 義 秀

学 位 論 文 題 名

仏教における生命観

－ 仏教の現代的課題－

本論文を審査した結果、その研究成果は以下の3点に要約される。

(1) 生命観というテーマを原始仏教から大乘仏教までの広い範囲で検討し、その結果を現代における仏教からの提言という具体的なものを導き出している点で、従来の先行研究には類を見ない。

(2) 日蓮の草木成思想についての新しい実践的解釈がなされている点。法華経修行者の成仏が同時に草木の成仏であるとし、両者の成仏は不二であるという新解釈を提示しているが、これは従来の日蓮教学には見られない新知見であると評価できる。

(3) 環境問題や平和という現代的課題に対して、自身の実践体験に基づいた具体的でかつ実践的な仏教からの提言が示されている点。この点が本論文の独自性として評価される。ただし、問題点として次のことが指摘された。

第一に、検討資料としての文献資料の多くが原典テキストでなく二次資料を用いている点が指摘される。このことは本論文の性格が文献研究に主眼を置くのではなく、従来の先行研究を踏まえて新しい解釈を提示しようとする性格のものであることに起因するものである。

第二に本論文の独自性として評価される自己の実践体験によって根拠づけられた提言は、同時に宗教実践者としての立場性が強く見られる側面もあったという評価がなされた点である。

本審査委員会は、問題点は指摘されるものの、上述の研究成果を提示している本申請論文に対し、博士（文学）の学位を授与する一定水準に達しているものと判定した。